

# 恵みと真理のニュース



2020年02月の三次 恵みと真理教会

韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net



[証]

**青年の時に世と不義と妥協しなくて、神様を畏れ、神様の御心を従うようにして下さって感謝します。**

私は、幼い時から、母の手を握って教会に通いました。小学生になってからは 同じクラスの友達と共に聖歌隊で奉仕しました。友達と共に教会で過ごす時間が、とても楽しかったので、礼拝が終わってから聖歌隊の練習を終えた後も教会のあちこちを歩き回った記憶があります。小学校6年生の下半期にプルートを習う友達がうらやましくて、私もプルートを習って中等部に入って聖歌隊でプルートで賛美をしました。しかし、神様に対する、信仰と愛をもって主に捧げる奉仕ではなかったです。ただ、プルートで演奏が好きで、メロディが好きで熱心に聖歌隊で活動に参加しました。そのような姿勢で奉仕したから、信仰がなかなか成長しませんでした。高校生になってはもう奉仕を辞め、義務感で主日礼拝を捧げました。高等部を卒業した後になってから奉仕を辞め、青年の集まりに行かなくなり、教会と主ともっと遠くなってしまいました。平日には学校に行き、週末にはアルバイトをしながら生活をしました。アルバイトをちょっと休んでいるある日に、教会学校に通っているときに仲良かった友達から連絡が来ました。“ウンジちゃん、土曜日には何をやるの？” “青年の集りに来れる。” 一度も青年礼拝に参席しなかったから私は迷いましたが、ついに断りました。しかし、友達は諦めなくて続けて連絡をしながら、積極的に参席をするのを勧めました。友達の関心と神様の恵みで私は高等部を卒業してから、3年ぶりに青年奉仕宣教会に出席しました。

初めて参席した集いで、私は新鮮な衝撃を受けました。教会学校で聞いた説教と聖書勉強とは全く違うような恵みを受けて、先輩と後輩と共に様々な悩みを分かち合いことが恵みでした。新しい家族区域で分かち合うようになって、その新家族部は私のように教会に来たばかりの青年達が多くて心が楽でした。新家族を担当する青年区域長から導かれて、すぐ青年礼拝に適應しました。青年奉仕宣教会に行ったばかりの時には、礼拝と祈りより分かち合う時間にもっと関心を持って参加しました。毎週、進行する集いに参加して、集中して説教を聞きながら、私の信仰も成長しました。その時期に、ちょうど田園聖殿で青年奉仕宣教会の修練会が開かれて参席しました。我が教会の標語である“恵みと真理充滿”の主題として修練会が開かれました。修練会で参加したことがきっかけになり、私はもっと信仰の目で神様を仰ぎ、畏れました。特に聖霊充滿の祈り会の時間になって自分を振り替えてみて涙を流し、神様に悔い改める祈りを捧げました。自ら世の中で住み、神様と離れ、忘れて生きてきましたが、神様は私を離れたことがなかったので限りなく涙を流しました。その時から私の信仰生活が変化させました。主日に党会長の牧師の説教を聞いて恵みを受けたので、私は平日の礼拝も愛して参席するようになりました。月曜祈り会、水曜祈り会、金曜徹夜の祈り会に参席しました。初めは月曜祈り会に行ったときには、長い時間祈るのが容易ではなかったです。水曜礼拝に参席する前には、どうして、平日礼拝を捧げるべきなのか否定的に思っていました。しかし、今は聖徒がなぜ、礼拝中心の生活をして、なぜ集めることに力を尽くすべきか、なぜ、熱心に祈るべきなのか、よく知っています。様々な患難や迫害、誘惑、試練が多いこの世で住みながら心を守って、神様の御言葉に従って生きるために、霊的な戦いに勝利するためには御言葉で充滿にならなければならないということを、様々なことを通

して体験し悟りました。

そして、私は恵みと真理教会をまことに愛するようになりました。修練会で我が教会の3代の目標に対する特別講義を聴いて 区域長達と長老と執事と執事の目標ではなく、私の目標であることを新たに認識しました。修練会から帰って来て、主日に大聖殿で礼拝案内奉仕をはじめました。誠実に任された場で最善を尽くしながら、神様に力を尽くして祈りました。この教会を愛するように国も愛するようになりました。神様を畏れ、委ねながら教会を愛する聖徒として、国が処する状況を見ることが出来ませんでした。神様は私に国と社会が今、どんな状況になっているのか、霊的な目で見ようとしてくださいました。党会長の牧師の説教を再び探して聞きながら心に感動と感激を受けました。また、青年奉仕宣教会と北朝鮮宣教会で様々な教育と祈り会を通して聖書的によく分別するようになり、祈りをするように導いて下さったことにも感謝します。

我が教会と青年の集いに参加して修練会に参席したことと 自我と高慢を捨て、御言葉の御組を愛しながら、平日礼拝を捧げた事、国を愛し切実な心で叫んで祈ったこと、教会を愛し、熱心に奉仕するようになったことすべてが私を愛し、変化させて下さった神様の恵みです。世俗的ではない神霊な恵みを愛し、神様と近づくことが真の幸背であることを悟りました。神様は続けて私を呼んで下さり、私の手を握ってくれました。“若き日に、あなたの造り主を心に刻め。／災いの日々がやって来て／「私には喜びがない」と言うよわいに／近づかないうちに。” (コヘレト12:1) ハレルヤ！ この御言葉の通り青年の時、この世と妥協せずに、全ての事を主に委ね、神様の御言葉に従順して生きます。私のすべての希望を成し遂げて下さる神様を仰ぎながら、感謝と賛美を捧げます。



[信仰コラム]

## 聖徒を助けて慰めてくださる聖霊様

“御霊もまた同じように、弱いわたしを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから...” (ローマ書8:26, 27)

聖霊様に対する知識と体験は信仰生活にとっても重要です。私達は聖霊様に対する知識と体験がより豊かになるよう渴望すべきです。聖霊様がなさる多様なことの中で聖徒を助けて慰めることに関して調べてみましょう。

第一、聖霊様は私達の活動と判断を助けてくださいます。

イエス様が救いの使役を完遂なさった後に天に上げられた後、別の助けぬしである聖霊様が来られました。そうして弟子達はイエス様と同行したように助けぬしでおられる聖霊に頼って親交をしながら大きい喜びと大胆で活動しました。その事実が良く表れる記録が使徒言行録にあります。エルサレムの初代教会の執事ピリポが聖霊様の指示と導きを受けて活動しました。バルナバとパウロが聖霊のお送りを受けて宣教旅行をしました。初代教会の信者達は常に聖霊様を助け主として認識し、聖霊様の指導と助けを求めてこれに従いました。聖霊様に深く依存して密接な親交を持ちました。第二、聖霊様は私達の弱さを助けてくださいます。

聖霊様の助けを受けるためにまず、自分が情弱な存在であるという事実を深刻に認識しなければなりません。次に、聖霊様が私達の情弱を助けるという事実を知るべきです。そして聖霊様の助けを頼って求めるべきです。

イエス様が祭司長の家の庭で尋問を受ける光景を目撃したペテロは恐れに包まれてイエス様を知らないと誓って否認しました。しかし、五旬の節に聖霊充滿を受けたペテロはいかなる脅威と逼迫にも屈しませんでした。自分の決心と意思だけで行わずに聖霊様の助けによって行う者になりました。それで彼はエルサレムの宗教指導者の前に捕まれて行っても堂々たるに弁論しイエス様を伝えました。結局には光榮な殉教者になりました。使徒パウロも一時は自分の知恵と経歴を信じて自信満々に行動したが、自分を依頼した態度を完全に捨てました。“わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである”という逆説的な言葉を言いました。自分の弱さを分かるほど、聖霊様の助けを頼る人は弱さが恥ではなく却って誇りになります。

聖徒は誰もお祈りの重要性と必要性についてよく知っているが、何をどのようにお祈りするかについては全て知りません。聖霊様は全知でおられるので私達の都合と事情を私達より良く知られ、何をどのように求めるのが父なる神様の思いに合うかを全て知られます。

従って、聖霊様が私達のお祈りを助けてくださるよう懇切に頼りながら求めなければなりません。

第三、聖霊様は私達を慰めてくださいます。

聖霊様は艱難と逼迫と悲しみを受けた聖徒と慰めてくださいます。五旬の節の日 120 門徒は彼らを逮捕しようとする群れのため恐れながら屋根裏部屋に集まりました。しかし、聖霊充滿を受けると主の慰めで大胆になりエルサレムの距離を闊歩しながら力強く福音を伝えました。聖霊で充滿なステパノ執事は主の慰めが心に溢れて自分を殺そうと石を持つ者達のために許しと愛のお祈りをしながら殉教しました。パウロとシラスはピリピで福音を伝える中、告発されて鞭を打たれて監獄の深い所に込められました。しかし、夜中に聖霊様の慰めが彼らの心中に満ちると喜びの心で賛美を歌い始めました。他の囚人が全て聞く程に声を出して歌いました。艱難の中にいる者達が聖霊様の慰めを受けて艱難の中にいる他人を慰めるのは聖徒から見られる特徴です。

皆さんは、聖霊が助けぬしとしてお越しになり共におられるという事実を意識しながら聖霊様に物事の助けと慰めを積極的に要請してください。そうして聖霊様の助けられて慰められる恵みを豊かに体験してください。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム『緑の牧場、清い川』本の語り中」

## イエス様の心を動かしたあるローマ軍の隊長



恵みと真理教会 チョヨンモク 牧師

社会生活は対人関係で成り立ちます。成功した社会生活をするためには二つの要素を備えなければなりません。他人の心を把握することと他人の心を動かせることです。他人の心を見透かすためには、その人の言葉と行動を注意深く探る必要があります。その人に関する情報をできるだけ、多く知るべきです。他人に心を動かすためには他人が関心を引くところから、一方進んで礼儀を守って、任されたことをよくできる能力を持つべきです。

人生には対人関係より以上に大事なことがあります。神様の関係です。神様の関係の中でも神様の心を知ることと、神様の心を動かせる二つの要素を揃えるべきです。このためには、必ず聖書を読んで考えなければなりません。神様の命令と約束を知らなければなりません。そして、聖書に登場する人物の模範に従うのが大事です。今日からこのような観点で、新約聖書で登場する人々を調べてみます。

イエス様が、カペナウムの町に入られると、ローマ軍の隊長がやって来て、『先生、うちの若い召使が中風で苦しんでおります。とてもひどく、起き上がることもできません。どうか、治してやってください。お願いします。』としきりに頼みました。イエス様は、『わかりました。では、行って治してあげましょう。』と肯定的に答えてくださいました。すると、ローマ軍の隊長の返事はこうでした。『先生、私には、あなたを家にお迎えするだけの資格はありません。わざわざ来ていただかなくても、ただこの場で『治れ』と言って下さるだけでけっこうです。そうすれば、召使は必ず治します。と申しますのは、私が上官に仕える身ですが、私の下にも部下が大勢おります。その一人にわたしが、『行け』といえは行きますし、『来い』といえは来ます。また奴隷に『あれをやれ、これをやれ』と命じると、そのとおりにします。私にさえ、権威があるのですから、先生の権威で、病気に『出て行け』と命じになれば、必ず治るはずです。

イエスは大変驚き、群衆のほうを振り向いて言われました。「これほど信仰深い人は、イスラエル中でも見たことがありません。皆さん、やがて、この人のような外国人がたくさん世界中からやって来て、神の国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに席に着くでしょう。ところが、神の国はもともとイスラエル人のために準備されたのに、多くのイスラエル人が入りそこねて、外の暗闇に放りだされ、泣いてくれやしがることになるのです。

その次、ローマ軍の隊長に『さあ、家に帰りなさい。あなたの信じたとおりの事が起こっています。』イエス様は、隊長が行うことをご覧になって“驚いて大きく褒めました。ここに驚くと思った表現は感心した意味です。隊長はイエス様に好感を与えて、イエス様の心を動かしました。隊長のどんな行動がイエス様の心を動かしたのか詳しく調べてみます。

### 第一は、病気になった僕を治させる考えで、いっぱいでした。

イエス様の公生涯の期間に多くの人々がイエス様に助けを求めましたが、ほとんど、自分や家族や親せきのため求めました。ところが、ここで隊長は自分の僕の治療するためイエス様に願い求めました。隊長が誠実な人であったことを私が推理することが出来ます。その僕は主人に肯定的な関心の対象になって、好感を持つような行動したことが確かです。その当時、奴隷とは悲惨存在でした。その奴隷は、主人の所有物として死と生きる主権は、主人が持っていました。ところが、隊長はその僕の病気が治るため力を入れたそうです。愛する心で苦痛を受けている人を助けるため、力を尽くす人はイエス様の心を動かします。

### 第二は、ユダヤ人の長老が説明した隊長の献身的な行為です。

ルカによる福音書を読むと、ユダヤ人の長老たちがイエス様に切に求めながら、隊長に対して紹介する場面があります。“長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。私たちの国民を愛して、会堂を建ててくださいました。」”隊長がユダヤ民族を愛しました。その人は具体的な表現でユダヤ人の会堂まで建ててくださいました。隊長は施すことをよくしました。最もユダヤ人が神様を畏れる生活をするように多くの財物を捧げて献身しました。主、神様を畏れる人を愛し、礼拝する人を助けることに力を尽くす人は、イエス様の心を動かします。

### 第三は、隊長の謙遜な人です。

ローマが、世界を支配している当時、ローマ軍の隊長の権威はすごでした。ローマ軍の隊長という職は 歳月さえ満たせば 得られることではありませんでした。長い間、彼と一緒にした軍人たちの投票で支持を受けるべきでした。人格と統率力、勇猛性など資質を備えなければならなかったです。隊長達は、植民地の占領軍の長教として、優越感があったので、植民地の人々に大体、高慢でした。

しかし、カペナウムの隊長はとても謙遜な人でした。彼はイエス様を家にお迎えするだけの資格がないと答えました。彼は、イエス様が、どなたなのか知りました。イエス様に対して尊敬以上の心を持っていました。彼はイエス様に対して、“主よ”と呼びました。この“主”という言葉はユダヤ社会で神様に対する称号です。

したがって、隊長は主であるイエス様が自分の家にお迎えする資格がないと話したことです。私たちの主、イエスキリストがどなたなのか詳しく知っている人は、謙遜に主を仕えるようになります。“ですから、神の力強い御手の下でへりくだりなさい。そうすれば、しかるべき時に神はあなたがたを高くしてくださいます。”

### 第四は、隊長の信仰です。

隊長は、イエス様に、“ただ、この場で『治れ』”と言ってくださるだけでけっこうです。と言いました。隊長の信仰は主の御言葉に根拠しました。イエス様が、十字架で死なれ釘打たれてお墓に葬られました。弟子たちがユダヤ人を恐れて、ドアを閉じて部屋の中にいる時、復活なされたイエス様が彼らに現れました。

そこで、弟子たちは驚いてイエス様の霊を見ているようにと思いました。“イエスは言われた。「なぜ、取り乱しているのか。どうして、心に疑いを抱くのか。私の手と足を見なさい。まさしく私だ。触ってよく見なさい。霊には肉も骨もないが、あなたがたが見ているとおりに、私にはあるのだ。」(ルカによる福音書 24 : 38, 39)と誓いました。”イエス様が彼らに釘の跡と足の傷おしめになりました。そして、何か食べ物がありますか。と尋ねになりました。焼き魚を一切れ差し上げると、イエス様はみんなの見ていて召しあがりました。

イエス様の十二弟子たちの中でも一人のトマスは、その時、その場にいませんでした。弟子たちがトマスに私たちがイエス様にお会いしたと話しました。トマスは自分がその場で共にいることを残念だと思わなくて、弟子たちの話を信じられませんでした。トマスは「主の御手に釘あとを見、この指をそこに差し入れ、この手を主のわき腹に刺し入れてみなければ、信じない。」と言いました。

トマスは自分が直接に確認しない限り、他の人々の話を聞いては信じられませんでした。その後、復活したイエス様が弟子たちが集まったところで再び現れました。その日はトマスも一緒にいました。イエス様はトマスに“さあ、あなたの指をこの手にあててみなさい。あなたの手をこのわき腹に刺し入れてみなさい。いつまでも疑っていないで信じなさい。”と話しました。復活したイエス様が直接にお目にかかったトマスは“嗚呼我が主、我が神よ。”とか極めて 叫びました。イエス様はトマスに「私を見たから信じたのですか。しかし、見なくても信じる者は幸いです。

隊長はイエス様に呪術行為を求めたり、要求しなかったです。それは、イエス様が、おっしゃる御言葉で充分でした。隊長は説明しましたが、“私にさえそんな権威があるのですから、先生の権威で病気に出て行けとお命じなれば、必ず治るはずです。と言いました。隊長は彼の日常にある事を類推して神霊な真理を悟る統率力がありません。隊長はイエス様を神様の権能を持っておられる方だと信じました。

イエス様は隊長の信仰に対して、感激しながらその信仰を大きく褒めました。“私が真実にあなたに話します。イスラエルの中で誰でもこのような、信仰を持っている人に会ったことがない。”と誓いました。そして“行きなさい。あなたが信じたとおりになるように。”ちょうどその時、その子は癒やされた。

カペナウムのあるローマ軍の隊長に向かってイエス様の心がこのように動いたことを調べてみました。愛する聖徒皆さんは、本文に出てくる隊長を見習って、行いをして、神様の心を動かす生活をするのを願います。